

状況論的アプローチによる社会科学学習評価の開発

—小学校第6学年単元「佐賀市まちづくりについて考えよう」における
パフォーマンス評価—

田本 正一¹, 佐長 健司²

Development of Social Studies Study Assessment by Situated Learning Approach:
Focusing on the Unit of sixth Grade in Elementary School Performance Assessment
in “Let’s Think about the Saga City Planning.”

Syouichi TAMOTO, Takeshi SANAGA

要 旨

社会科学教育では授業と学習評価は別々に研究が進んできた。そのため、授業原理と学習評価原理が乖離している場合も多々あった。もちろん授業原理と学習評価原理は一体化して開発されるべきである。本稿は状況論の原理による社会科学授業と学習評価の一体的開発を目指す。そうすることは社会科学授業と学習評価の原理的一致を促すこととなる。

本稿では状況論的アプローチによる社会科学学習評価の原理的基礎付けを3点示す。第1は、市民社会に埋め込まれた社会科学学習評価である。社会科学学習評価も市民社会において意味や価値を持つものとするのである。第2は、社会科学パフォーマンス評価である。市民社会において意味や価値のあるパフォーマンスを測定することで市民としての行為を評価していく。第3は、「逆向き設計論」に基づく学習評価である。逆向き設計論は目標設定後に学習評価を計画する。その後、授業を開発していく。この設計により目標に対応した学習評価を計画することができる。すなわち、目標、学習評価、授業の一体的開発が志向できるのである。

以上の社会科学学習評価の原理的基礎付けに基づき、小学校社会科学第6学年単元「佐賀市まちづくりについて考えよう」の授業と学習評価を開発する。そうすることで授業原理、学習評価原理が一体化されたモデルを示すこととしたい。

1 本小論の目的

本小論の目的は状況論的アプローチによる学習

評価の開発を行うことである。状況論的アプローチとは次のようである。「行為は本来的に状況に埋め込まれたものであり、状況に埋め込まれた行為は本質的にアドホックな（その都度な）ものだという考え方」¹⁾である。つまり、全ての言葉や行為の意味や価値は状況に埋め込まれている。さ

¹⁾ 佐賀市立春日北小学校

²⁾ 佐賀大学 文化教育学部 教科教育講座

らに言葉や行為と状況は相互構成的でもある。そのため、言葉や行為がどのような状況に埋め込まれ、どのような意味や価値を持つのか明確にする必要がある。つまり、状況論的アプローチでは言葉や行為だけを考察対象とするのではなく、それが埋め込まれている状況を含めたものを考察対象とするのである。

以上の状況論的アプローチによれば、学習の捉え方を大きく転換することができる。すなわち、学習を個人への内化というプロセスと捉えるのではなく、学習を社会的実践と捉え直すことである。そのことは知識や技能の習得とする学習目標から市民としてのアイデンティティを高めるという学習目標へと転換することとなる。それらを考慮した社会科授業を状況論的アプローチによる社会科授業と呼ぶことにする²⁾。

このような社会科授業の授業原理は従来のそれとは異なる。そのため、本小論では状況論的アプローチによる社会科学学習評価について原理的基礎付けを行うことを目的とする。状況論的アプローチ社会科授業では、社会的論争が埋め込まれた状況の分析を行い、それに基づく討論の学習が展開される。状況の分析は学習対象を社会的論争だけにとどめず、それが埋め込まれている状況まで含めて考察していくことを可能にする。また、討論を行うことは、学習者が社会的実践へ参加していくことを意味する。つまり、市民社会の成員としてのアイデンティティを形成していくのである。よって状況論的アプローチによる社会科授業では状況の分析の指導、社会的論争への参加としての討論が重要となる。それらの内容が充実するならば、それに応じて市民としてのアイデンティティを高めるという学習目標の十分な達成が期待できるからである。

では状況の分析、社会的論争への参加としての討論をどのように評価すべきか。それは状況の分析、討論での学習成果、すなわち市民のパフォーマンスが現実の市民社会でどのような意味や価値を持つのかという観点で評価していくことである。つまり、状況としての市民社会を想定し、学

習者の市民のパフォーマンスを評価していくことが状況論的アプローチによる社会科学学習評価の原理的基礎付けとなっていく。さらに授業開発のプロセスも重要となる。特に学習評価が授業を規定するということから考えれば、学習評価目標の設定後は、その学習評価の方法を設定していくことが望ましい。すなわち、「逆向き設計」論に基づく授業と学習評価の開発である。「逆向き設計」論に基づけば学習目標、学習評価さらには授業の一体的開発を目指していくこととなる。

以上のことから本小論では第1に、状況論的アプローチによる社会科学学習評価の原理的基礎付けを行う。第2は、原理的基礎付けに基づき、「逆向き設計」を開発手段として社会科授業と社会科学学習評価のモデルを示すこととする。単元は小学校第6学年「佐賀市まちづくりについて考えよう」³⁾である。状況論的アプローチの原理を貫く社会科授業と学習評価の開発はそれらの精緻化を進めていくこととなる。

2 状況論的アプローチによる社会科学学習評価の原理的基礎付け

(1) 市民社会に埋めこまれた社会科学学習評価

状況論的アプローチによる社会科授業では学習内容として現実の社会的論争を取り扱う。社会的論争も特定の状況に埋め込まれている。特定の状況とは市民社会である。市民社会という状況のなかで社会的論争は生じる。そのため、社会的論争を学習内容として取り扱うには、それが埋め込まれている市民社会を切り離して考えることはできない。

このような状況論的アプローチの原理に従うならば、社会科学学習評価も同様に考えていくことができるであろう。すなわち、社会科学学習評価という行為を市民社会に埋め込んでいくことである。そのことは市民社会という状況と社会科学学習評価を相互構成的なものとし、切り離せない関係にすることである。

市民社会と学習評価が切り離された例として次

のものがある。佐長健司は次のように述べる。「受験のための学習は入学試験の状況に埋め込まれていて、その他の現実社会等の状況においては意味と価値を失う」⁴⁾と言う。このように入学試験の状況に埋め込まれた学習評価は市民社会を切り離しているのである。

このような問題を改善するためにはやはり状況としての市民社会を自覚すべきであろう。市民社会を想定するならば、学習評価という行為はその状況に埋め込まれる。そのことは市民社会と学習評価を相互構成的なものとする。例えば、学習評価の目標、内容、方法を設定する場合は市民社会において意味や価値を持つものであるかどうかに基づき作成する。また、現実の市民社会が変化すれば、それに応じた学習評価が検討され、作成されるのである。

以上のように、状況論的アプローチの社会科学学習評価では学習評価という行為を市民社会に埋め込むことが重要となる。それらは相互構成的なものとなり、切り離せない関係となっていく。

状況論的アプローチによる社会科授業と学習評価は市民社会において意味や価値を持つかという視点から開発しなければならない。そのように考えるならば、評価の対象である学習成果は現実の市民社会のなかで意味や価値を持つ市民的パフォーマンスとなろう。それは「現実社会的論争があった場合、そこに参加して適切な発言を行い、他者ととともに社会的論争をより望ましいものへと導こうとする」⁵⁾ものである。そのため、個別の知識を問う一問一答のような、いわゆるペーパーテストで求められる解答の行為は市民的パフォーマンスと呼ぶことはできない。実際の授業での市民的パフォーマンスは現実的に認められる内容で作成されたレポート、討論などを挙げることができる。

以上のように状況論的アプローチによれば、状況としての市民社会のなかに学習評価の行為を埋め込むことが重要となった。また学習成果を現実的な市民社会においても意味や価値を持つ市民的パフォーマンスとすることでよりよい社会の形成

を目指す市民を育成していくことが重要である。これらのことが状況論的アプローチによる社会科学学習評価の原理的基礎付けの第1である。

(2) 社会科パフォーマンス評価

市民社会を状況として想定し、そのなかで意味や価値を持つ市民的パフォーマンスを学習成果とすべきであることが明らかとなった。では、市民的パフォーマンスをどのように評価できるのか。パフォーマンス評価を手がかりにしてみよう。

パフォーマンス評価は伝統的な択一式の標準テストから脱却したいという要望から開発されてきた。特に注目すべきは、「話したり書いたりしてコミュニケーションする技能、問題解決活動など、私たちが生徒に取り組んで欲しいと願っている現実の学習活動をモデルにして評価しようとするものであり、択一式テストのようにこれらを分断して評価することではない」⁶⁾ということである。また「その目的は、評価によって学習指導を歪めないこと」⁷⁾であるとする。

パフォーマンス評価では、現実の状況を重視する。現実の状況では、様々な要因、原因から判断を下さなければならない。よってパフォーマンス課題も分断的な知識ではなく、総合的な知識や能力を求めることとなる。さらにパフォーマンス評価にはルーブリックの活用も重要となる。ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数値的な尺度(scale)と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を示した記述語(descriptor)から成る評価基準表のこと」⁸⁾である。

以上をもとに佐長・真子は社会科においてパフォーマンス評価の試みを行っている⁹⁾。その論考で社会科のパフォーマンス評価は、「現実的な社会的論争に参加し、よりよい社会を形成しようと議論することを直接的に評価するものでなければならない。そうすることが学習者の市民的アイデンティティを、その一方で社会をよりよいものにしていくための価値判断や議論の力を総合的に評価し、育成することを可能にする」¹⁰⁾と述べる。価値判断や議論の力は市民的パフォーマンス

として考えることができる。それを総合的、直接的に評価できることは大きな示唆を得る。

また、社会科パフォーマンス評価では課題やルーブリックにどのような状況を描出するかが重要となる。それらに状況を描出することは学習者を現実の市民社会に埋め込むことになるからである。例えば、パフォーマンス課題において社会的論争に対する意見文を作成することを求めたとしよう。そこには社会的論争が埋め込まれている状況を具体的に描出する。そのことで学習者は社会的論争全体の意味や価値を理解することができる。パフォーマンス課題も状況から切り離すことはできないのである。

このようにパフォーマンス評価を基盤として現実の市民社会の状況を明らかにして評価を行うことが状況論的アプローチによる社会科学学習評価の第2の原理的基礎付けとなろう。

(3) 「逆向き設計」論に基づく社会科学学習評価

状況論的アプローチによる社会科学学習評価の原理的基礎付けについて論じてきた。そこで明らかとなったことは学習評価という行為を市民社会に埋め込み、そのなかで意味や価値を持つ市民的パフォーマンスを学習成果とした。さらにその学習成果はパフォーマンス評価によって測定することが妥当である。

では実際どのように社会科学学習評価を開発していくべきか。開発の手順を明らかにしたい。そこで基盤となる考え方が「逆向き設計」論 (backward design) である。西岡加名恵によればそれは次のようになろう。「逆向き設計」論とはウィギンズ (Wiggins, G.)、マクタイ (McTighe, J.) によって提唱されたカリキュラム編成論である。具体的には①目標を明確にする (identify desired results)、②目標が達成したかどうかの具体的な評価計画を立てる (determine acceptable evidence)、③学習指導計画を作成する (plan learning experiences and instruction)、という3段階を経て、カリキュラムや単元を設計することを主張するものである。そのため、最終的に得ることができる学習成果から

遡ってカリキュラムや単元を開発していくことや評価を事前に構想することから「逆向き」と呼ばれている¹¹⁾。

従来の単元や授業を実践した後、学習評価案を作成するときは学習目標と学習評価の対応関係が不明確であった。時には学習目標から逸脱した学習評価が作成された例も挙げられる¹²⁾。しかし、この論に基づけば、学習目標と学習評価の対応関係が明確になる。なぜなら、学習目標の設定後に学習評価の構想を立てるからである。

さらに「逆向き設計」論は状況論的アプローチによる社会科学学習評価を精緻化する。評価が授業後に作成されたとしよう。一般的な評価計画の場合である。その場合、市民社会において意味や価値のあるパフォーマンスを想定したとしても評価にずれが生じることもある。目標と評価の一体化が徹底されないからである。しかし、評価を授業計画以前に構想することで目標と評価の一体化が徹底されるであろう。すなわち、より市民社会で意味や価値を持つ社会科授業を展開することができるのである。

以上から「逆向き設計」論に基づく授業と評価の開発は次のように展開する。すなわち、市民社会において意味や価値を持つ学習目標を明確にし、その目標の達成を証明できる評価計画を作成する。さらに目標や評価に対応した授業や指導計画を作成していくのである。現実の市民社会において、よりよい市民的パフォーマンスを期待し、それらを実現できるような授業と評価の開発、つまり「逆向き設計」論に基づくことが状況論的アプローチによる原理的基礎付けの第3である。

3 状況論的アプローチによる社会科授業と学習評価の実際

(1) 単元「佐賀市まちづくりについて考えよう」について

本小論で取り上げる学習内容は「佐賀市まちづくり」である。地方全体では、工場が次々と閉鎖されたり、身近な店舗が消えたりし、どこも

「シャッター街」と呼ばれる風景が広がっている。佐賀市も同様の問題を抱えている。佐賀市は平成17年1市3町1村が合併し、新しい佐賀市が誕生した。それに伴い、それぞれで策定されていた都市計画マスタープランを統一した『佐賀市都市計画マスタープラン』（以下マスタープラン）を制定した。マスタープランとは、市町村における都市の将来像や土地利用の基本方針あるいは都市施設の整備方針を明らかにすることで都市計画の総合的な指針としての役割を持つ。

佐賀市もマスタープランにしたがい計画を進めている。しかし、マスタープランが佐賀市にとって妥当であるかどうかの検討も必要である。妥当性の検討は佐賀市が埋め込まれている状況の把握が重要であろう。例えば、経済・産業的文脈情報、歴史・文化的文脈情報、交通・地理的文脈情報などである。佐賀市が埋め込まれている状況を把握し、佐賀市が衰退しているという主張の関係を明確にしていく。そうすることで人口減少、年間商品販売額の減少などの原因を詳細に分析することができるのである。分析後には佐賀市の状況に対応した「佐賀市まちづくりプラン」の作成を行っていく。

以上が単元の概要である。これらの単元において社会的実践への参加という状況論的アプローチによる社会科授業と学習評価のあり方を提示する。

(2) 単元の総括目標と下位目標

①総括目標

佐賀市が埋め込まれている状況进行分析し、その分析を通して佐賀市中心街活性化優先プランの有効性を検討することができる。また佐賀市まちづくりの方向性について討論を行い、その結果に基づく主張を作成することができる。

作成する主張とは次のようなものである。

A 経済を優先したまちづくりに賛成する。なぜなら、佐賀市は経済の活性化は他の2つの政策よりも優れているからである。なぜ経済の活性

化がよいかというと、近郊の福岡市と同じような経済発展にはならないが、ニーズに合わせた商品の開発、販売により独自性が高まるからである。

B 福祉を優先したまちづくりに賛成する。なぜなら、佐賀市の福祉を進めていくことは他の2つの政策よりも優れているからである。なぜ福祉の政策がよいかというと、佐賀市は将来高齢化が予想され、その対策を行うことで安心したまちづくりを実現できるからである。

C いろいろな機能が集まったまちづくりに賛成する。なぜなら、いろいろな機能を集めることは他の2つの政策よりも優れているからである。なぜいろいろな機能が集まることがよいかというと、移動が簡単であり、便利さを高めることで独自性ができるからである。

総括目標である主張の作成を構成する下位目標として知識目標、能力目標、態度目標を設定する。

②知識目標

- ・佐賀市から近距離に福岡市や長崎市などの大都市がある。またそれらの都市には特急などの交通機関によって短時間で移動することができる。
- ・商業・サービス業の割合、年間商品販売額ともに福岡市が佐賀市を上回り、その差も大きい。
- ・佐賀市民は安心して住みよいまちづくり、お年寄りに対してやさしいまちづくり、佐賀市独自の産物や自然を利用したまちづくりを希望している。

③能力目標

- ・佐賀市まちづくりの方向性について自己の立場を決定し、多様な資料を用いて主張を作成することができる。
- ・佐賀市まちづくりの方向性についての討論では自己の立場を主張するとともに異なる立場の主張を理解して批判を行い、さらに異なる立場からの批判に対して再批判を行うことができる。
- ・討論における発言や内容を記録し、それらを比

較検討し、主張を評価することができる。

- ・評価に基づき主張を修正することで、討論においてみられたような批判に耐えられるような主張をまとめることができる。

佐賀市まちづくりに対するよりよい主張を作成しようとする。

(3) 社会科学習評価実施案の作成

①評価の目標

単元目標は佐賀市まちづくりの方向性について討論を行い、成長した主張を作成することである。成長した主張とは前項で示したものである。そのため、それがどの程度可能になったか、という目標達成について測定することである。具体的には次のような討論を行い、主張を的確に行うことを測定する。

④態度目標

- ・現実の社会的論争である「佐賀市まちづくり」について関心を高め、積極的に調べたり、資料を収集したりしようとする。
- ・佐賀市まちづくりの方向性の討論において、根拠を明らかにして主張を正当化しようとする。
- ・正当な批判を受け入れ、自らの主張を修正し、

②評価対象となる討論の展開図

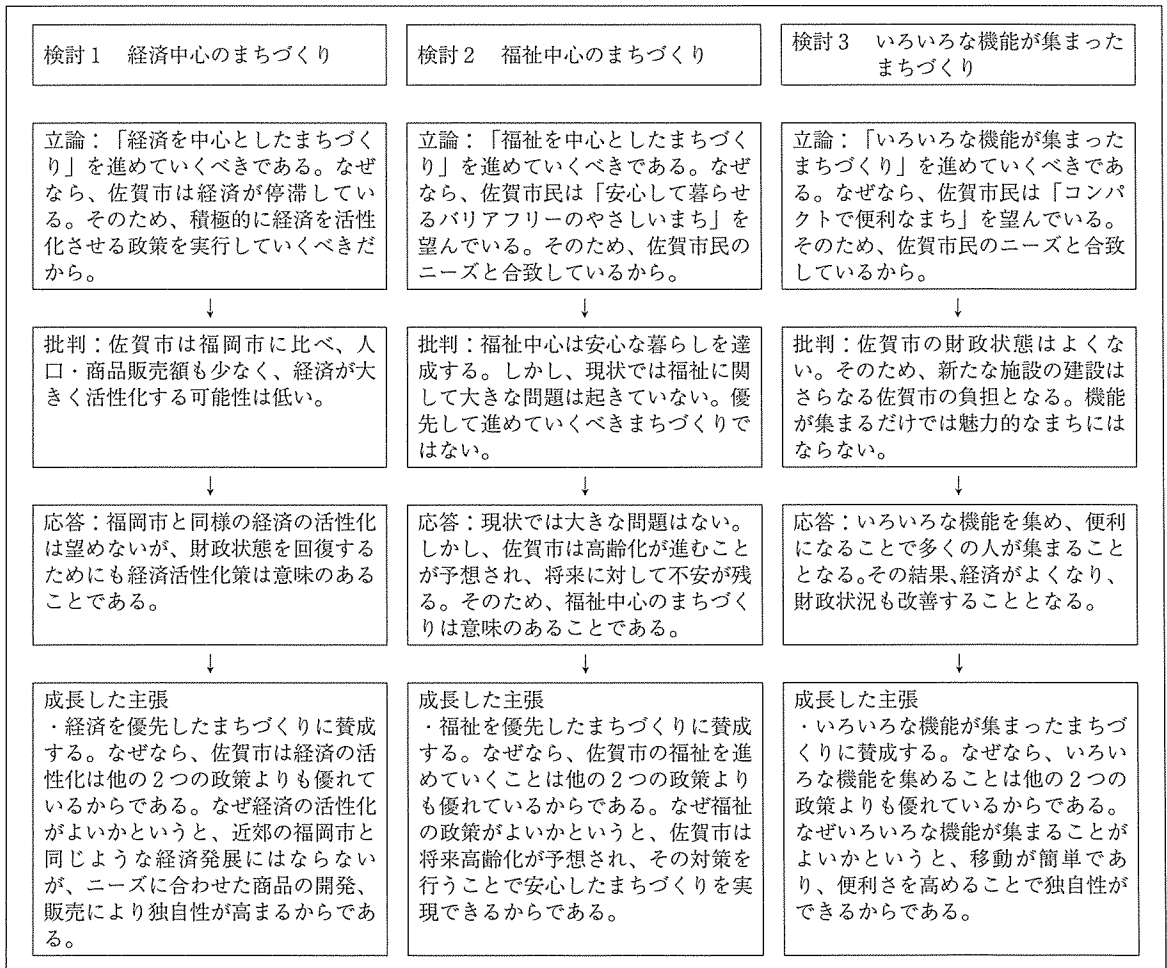


図1 評価対象の討論展開図

③パフォーマンス課題

課題

佐賀市はシャッター街と呼ばれるように多くの店が倒産し、衰退が進んでいます。佐賀市長や佐賀市民はこのままの状況はよくないと思い、よりよい佐賀市のまちづくりを行おうと考えています。しかし、どのようなまちづくりを行うかについては意見が対立しています。次のような意見です。

- ① 佐賀市は経済を中心としたまちづくりを進めていくべきである。
- ② 佐賀市は福祉を中心としたまちづくりを進めていくべきである。
- ③ 佐賀市はいろいろな機能が集まった便利なまちづくりを進めていくべきである。

あなたはどのようなまちづくりを進めていくべきであると考えますか。討論を生かして意見をまとめなさい。その際、次の観点から評価を行います。

- A どのようなまちづくりを進めるべきかという結論を明確にし、その理由をしっかりと書き、討論のなかでの自分の意見や友達の意見、資料などを書くこと。
- B 相手に読まれることを意識し、誤字・脱字がなく、自分の意見をアピールできるよう書くこと。

④評価の方法

討論の評価については学習者各自に討論を振り返らせて、2つの立場から文章を書くパフォーマンスを行わせる。測定のための観点及び基準を設定するために主張の構造を明らかにする。

結論

経済中心のまちづくりを進めるべきである。

根拠



結論

佐賀市は経済の活性化は他の2つの政策よりも優れているからである。

(価値的理由)



根拠

討論における自他の発言 討論において示された資料など

(具体的事実を踏まえた理由)

このように主張の構造は結論と根拠、さらに根拠にも結論(価値的理由)と根拠(具体的事実を踏まえた理由)からなる。そのため、この構造を満たしているかどうかを基準として設定することができる。次のようである。

基準1 論題に対する結論を述べているが、十分な根拠を欠いている。

基準2 論題に対する結論とその根拠を述べている。

基準3 論題に対する結論とその根拠、さらにそれを根拠づける具体的事実を踏まえた理由を示してい

る。

さらに主張をよりよく相手に伝えるために伝達の観点を設ける。以下のようにする。

基準1 誤字、脱字や不適切な表現があり、読み手を意識していない。

基準2 読み手を意識し、主張をアピールする表現が見受けられる。

基準3 読み手を意識し、主張を強くアピールする表現が多数見受けられる。

⑤ ルーブリック

		評価の観点	
		主 張	伝 達
観点の 説明		与えられた課題に対して、自己の立場を選択して、これからの佐賀市が行うべきことを明確に主張すること。	読み手を意識し、他者によりよく伝えることができること。
評価の 基準	3	以下の例のように、論題に対する結論とその根拠としての価値的理由を挙げ、さらにそれを根拠づける具体的事実を踏まえた理由を示している。 ・経済を優先したまちづくりに賛成する。なぜなら、佐賀市は経済の活性化は他の2つの政策よりも優れているからである。なぜ経済の活性化がよいかというと、近郊の福岡市と同じような経済発展にはならないが、ニーズに合わせた商品の開発、販売により独自性が高まるからである。	次の例のように読み手を意識し、主張を強くアピールする表現が多数見受けられる。 ・結論を強くアピールする表現を見受けられる。 ・効果的な図やイラストが加えられている。
	2	以下の例のように、論題に対する結論とその根拠としての価値的理由を挙げている。 ・経済を優先したまちづくりに賛成する。なぜなら、佐賀市の経済の活性化は他の2つの政策よりも優れているから。 ・福祉を優先したまちづくりに賛成する。なぜなら、佐賀市の福祉を進めていくことは他の2つの政策よりも優れているから。	次の例のように読み手を意識し、主張をアピールする表現が見受けられる。 ・結論をアピールしている。 ・図やイラストが加えられている。
	1	以下の例のように、論題に対する結論を述べているが、十分な根拠を欠いている。 ・経済の活性化は佐賀市にとってよいことである。 ・福祉を進めていくことは佐賀市にとってよいことである。 ・いろいろな機能が集まったまちづくりは佐賀市にとってよいことである。	以下の例のように、誤字脱字や不適切な表現があり、読み手を意識していない。 ・漢字を書き間違える。 ・段落を設けていない。 ・汚く書き殴っている。など

(4) 小学校第6学年単元「佐賀市まちづくりについて考えよう」の指導計画

主 題	主な学習内容及び学習活動
第1時 佐賀市における衰退の現状	地方の商店街は「シャッター街」と呼ばれる現状である。今後も地方の経済的衰退は予測されている。佐賀市も同様の問題を抱える。佐賀市の衰退の現状を経済や人口の増減から理解していく。
第2時 佐賀市衰退問題の分析	佐賀市が衰退しているという主張を個別に分析する。分析の手法としてはツールミンの議論のレイアウトを援用する。主張を結論、データ、理由付けに分けて当てはめ、視覚的にも明確にする。
第3時 佐賀市が埋め込まれている状況の分析	佐賀市が埋め込まれている状況の分析を行う。状況の分析とは社会的論争が埋め込まれている状況の描出を行い、論争全体の意味や価値を明らかにしていくことである。佐賀市が埋め込まれている状況とは交通地理的文脈情報、経済産業的文脈情報、歴史文化的文脈情報である。

第4時 討論「佐賀市まちづくりの今後の方向性について決めよう」の準備	社会的論争への参加としての討論の準備を行う。本時では、実際に提案されている佐賀市の今後の方向性を検討し、討論のための主張を作成していく。
第5時 討論「佐賀市まちづくりの今後の方向性について決めよう」	作成した主張をもとに討論を展開する。討論では経済優先、福祉優先、いろいろな機能を持った便利なまちづくり優先プランの検討を行う。各プランの実行可能性、重要性について批判を行い、明らかにしていく。
第6時 佐賀市まちづくりの今後の方向性についての主張作成	討論を振り返って、それぞれのプランの主張とそれに対する批判とを比較し、それぞれの主張の評価を行う。評価することで主張を作成していく。主張を作成する際には、結論と根拠を明らかにするようにして、レポートをまとめる。

(5) 小学校第6学年単元「佐賀市まちづくりについて考えよう」の主な学習過程

主な発問	主な学習内容及び学習活動
<p>○地方の現状と佐賀市の中心商店街の現状はどのようなものであるか。</p> <p>・佐賀市はどのような対策をしているか。</p> <p>・どのような効果が出たか。</p> <p>○佐賀市が衰退している原因は主に何と考えられているか。</p> <p>・佐賀市が衰退している原因を結論、データ、理由に分け、議論のレイアウトによって分析しなさい。</p>	<p>○佐賀市は経済が停滞し、悪化している。特に中心商店街は衰退が進んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐賀市中心街の人通りが減少している。 ・中心街に再開発された大型店舗が倒産した。 ・佐賀市の年間商品販売額が減少している。 ・佐賀市は平成17年に新佐賀市誕生を契機に「佐賀市都市計画マスタープラン」(以下マスタープラン)を作成し、対策を行っている。 ・目に見える効果はまだ現れていない。しかし、人口減少が止まるなど一定の効果は考えられる。 ・佐賀市の人口が減少していること。 ・佐賀市の年間販売商品額が減少していること。 <p>【人口減少についての主張構造】</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">D 若者が流出することで人口減少が起きている。</div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 10px;">→</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 10px;">C 佐賀市は衰退している。</div> </div> <div style="margin-top: 10px; text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">W なぜなら、若者の流出によって地方の経済が悪くなるから。</div> </div> <p>【年間商品販売額についての主張構造】</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">D 大都市での買い物が増えることで年間商品販売額が減少する。</div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 10px;">→</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 10px;">C 佐賀市は衰退している。</div> </div> <div style="margin-top: 10px; text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">W なぜなら、大都市で買い物することで地方での消費が減るから。</div> </div>

<p>○佐賀市が埋め込まれている状況の分析をなさい。導出する状況と次の3つである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通・地理的文脈情報 ・経済・産業的文脈情報 ・歴史・文化的文脈情報 <p>○討論のための主張を作成しなさい。</p> <p>○佐賀市はどのようなまちづくりを進めるべきか検討しなさい。</p> <p>○佐賀市はどのようなまちづくりを進めるべきか、意見をまとめなさい。その際、レポート作成の観点を参考にして意見を作成しなさい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・佐賀市から近距離に福岡市や長崎市などの大都市がある。またこれらの都市には特急などの交通機関によって短時間で移動することができる。 ・商業・サービス業の割合、年間商品販売額ともに福岡市が佐賀市を上回り、その差も大きい。 ・佐賀市は広い平野を活用した農業を中心とした発展を展開してきた。また歴史的遺構も多く、それを生かしたまちづくりも進めてきた。 ・経済を優先したまちづくりを行うべき。 ・福祉を優先したまちづくりを行うべき。 ・いろいろな機能が集まった便利なまちづくりを行うべき。 ・(討論の展開については図1に示している。) ・(作成される主張については総括目標において示している。)
---	--

4 小 括

本小論では状況論的アプローチによる社会科学学習評価の開発を行った。特に評価方法ではパフォーマンス評価法を取り入れ、学習者の市民的パフォーマンスの測定を可能とした。また本小論では、状況論的アプローチによる学習評価の原理的基礎付けを3点提示した。要約すると、次のようである。

第1に状況論的アプローチによる社会科学学習評価の原理的基礎付けは学習評価という行為を市民社会に埋め込んでいくことである。埋め込むとは社会的実践の一部としていくことである。学習評価という行為が社会的実践の一部となることでそれらは相互構成的なものとなる。第2に市民的パフォーマンスについて検討した。それは市民社会で意味や価値を持つことができるパフォーマンスであった。具体的には討論、現実的に認めることができるレポートの作成であった。これらの達成程度を測定していくことでよりよい市民のアイデンティティを形成していくことになっていく。第3に「逆向き設計」論に基づく授業、評価案の作

成について検討した。「逆向き設計」論では目標と評価の一体的開発を目指す。市民社会で意味や価値が認められる目標を設定し、目標達成の程度を測定する評価案を作成することでより市民社会を自覚した授業の開発となるのである。そのことは授業後に評価案を作成する場合よりもより状況論的アプローチによる社会科学学習評価を精緻化していく。

しかし、課題も残る。それは集団の評価である。本小論では個人のパフォーマンスを評価対象とする。よりよい議論が展開できたかなど集団のパフォーマンスをどのように評価すべきかについては次の課題としておく。

【注及び引用参考文献】

- 1) ルーシー・A・サッチマン (佐伯胖監訳)、1999、『プランと状況的行為—人間・機械コミュニケーションの可能性—』産業図書、p. iii。
- 2) 状況論的アプローチは次の文献から示唆を得ている。ジーン・レイヴ／エティエンヌ・ウエンガー (佐伯胖監訳)、1993、『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書。サッチマン、前掲1)を参照して欲しい。

- 3) 小学校社会科第6学年単元「佐賀市まちづくりについて考えよう」の授業プランは次のものに掲載予定である。田本正一、「状況論的アプローチによる社会科地域学習の開発」社会系教科教育学会編『社会系教科教育研究のアプローチ―授業実践のフロムとフォー―』学事出版、2010年1月刊行予定。状況論的アプローチによる社会科授業では次のような原理とする。目標は社会的実践への参加とする。内容は市民的パフォーマンスとする。方法は3つである。第1は、論争の分析学習である。第2は、状況の分析学習である。第3は、社会的論争への参加としての討論学習である。以上の原理を基に授業を開発している。
 - 4) 佐長健司、2008、「社会科学学習指導案の状況論的検討―プランの呪縛からの解放と状況への自由―」日本社会科教育学会第58回発表資料、p.1。
 - 5) 佐長健司・真子靖弘、2008、「公民的資質を育成する社会科パフォーマンス評価の開発」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第13集、第1号、p.156。
 - 6) キャロライン・ギップス（鈴木秀幸訳）、2001、『新しい評価を求めて―テスト教育の終焉―』論創社、p.135。
 - 7) 同。
 - 8) 田中耕治編、2003、『教育評価の未来を拓く―目標に準拠した評価の現状・課題・展望―』ミネルヴァ書房、p.205。
 - 9) 前掲5)
 - 10) 前掲5)、p.160。
 - 11) 西岡加名恵、2005、「ウィギンズとマクタイによる『逆向き設計』論の意義と課題」日本カリキュラム学会編『カリキュラム研究』第14号、p.16についての表記を筆者が一部修正を行い、要約した。
 - 12) このような問題を改善するため次のような論考が出された。伊東亮三、池野範男、1986、「社会科テストの教授学的研究（Ⅰ）―テスト問題作成の基本モデル―」日本教科教育学会編『日本教科教育学会誌』第11巻、第3号、pp.9-14。伊東亮三、木村博一、棚橋健治、1987、「社会科テストの教授学的研究（Ⅱ）―テスト問題の分析と歴史理解の構造―」日本教科教育学会編『日本教科教育学会誌』第12巻、第3号、pp.11-16。伊東亮三、吉川幸男、1987、「社会科テストの教授学的研究（Ⅲ）―望ましいテスト問題作成の観点―」日本教科教育学会編『日本教科教育学会誌』第12巻、第2号、pp.7-12。
- さらにこれらの論考をもとに次のような実践が展開されている。
- 池野範男他、1990、「社会科テストの教授学的研究（Ⅳ）―『テスト構成案』の必要性―」広島大学教育学部・附属共同研究体制『研究紀要』第18号、pp.55-65。池野範男他、1991、「社会科テストの教授学的研究（Ⅴ）

―テスト構成案の開発(2)―」広島大学教育学部・附属共同研究体制『研究紀要』第19号、pp.117-127。池野範男他、1992、「社会科テストの教授学的研究（Ⅵ）―テスト構成案の開発(3)―」広島大学教育学部・附属共同研究体制『研究紀要』第20号、pp.71-80。池野範男他、1993、「社会科テストの教授学的研究（Ⅶ）―テスト構成案の開発(4)―」広島大学教育学部・附属共同研究体制『研究紀要』第21号、pp.63-72。